

「待降節の希望」

ローマの信徒への手紙13章8節-14節

- 1、待降節とは何か。「キリスト教で降誕祭（クリスマス）前4週間。旧約の民にならい、主キリストの誕生を祝う準備の期間。アドヴェント。」（広辞苑）と説明される。教会暦はその第一主日から始まる。4世紀にはこの暦にあわせて聖書日課が整えられてきた。アドヴェントとは「到来」の意味。多くの教会でロマ13章11節以下の「眠りから覚めるべき時」をこの季節の信仰的自覚として大切にしてきた。
- 2、「くらきにねむるつみびとも／じひのひかりにけふよりは／ちりのうきよのゆめさめて／うれしき身とはなりにける」。これは日本最初期の讃美歌である（「神戸版讃美歌」）。そこには島崎藤村ら近代詩の源流があると指摘され評価されているものである。「慈悲」など仏教用語を用いてはいるが、日本の初代信徒が自分たちが縛られてきた価値観とその中に埋没している自分を自覚的にとらえ、「覚める」という自覚で新しい生き方を把握している。当時「くらきにねむるつみびと」という自覚がどれ程個の内面的深さを持っていたかは分からない。封建的な縦社会の桎梏が明治以後壊れて、一人一人がどう生きるかの困惑があったに違いない。また「慈悲」の光に触れることがどのようなものであったかは分からない。多分「他力」の自覚であったであろう。しかし、とにもかくにも、以前の自分とは別の自分へと飛躍していることが「覚める」こととして捉えられている。
- 3、「ロマ書」でパウロは「罪の増し加わったところには恵みもますます満ちあふれた」（6:20）といっている。「罪」や「恵み」の自覚は、信仰生活のそれぞれの段階で深化してゆくものである。一定の客観的規準に達するというものではない。自分がもうけた規準からすらも自由にされるところに「眠りからさむべき時」の訪れがある。自分で思い込んだ規準からの解放を意味している（自己義認からの解放。パウロの神学的テーマでは、律法から解放されて福音へと入れられて行く転換に気づかされること）。これは一回的なことではなく（もちろん初めの体験や契機の自覚はあるだろう）、しかし繰り返し替えされる自覚である。信仰による生活が自覚される前から「既に」起こっていて、「今や」近づいている出来事である。「夜は更け、日が近づいた」（13:12）と認識されるかも知れない。内面の出来事への出会いである。
- 4、田中正造について林竹二（「田中正造の生涯」）氏がこう書いている。谷中村が権力によって破壊されてゆく場面で、知識人木下尚江と行動者正造の振る舞いが異なる。「正造の場合は一つのことを理解する、あるいは理解できるようになるのは、理解できなかった時の自分と別の人間になることであった」。「別の人間になる」とは「変わる」ことである。いや「変えられる」ことといった方がよいかも知れない。「眠りより覚めるべき時」とはそういうものであろう。自分が「変わる」いや「変えられる」かもしれないというのは大きな希望ではないであろうか。